

解剖にある。『平和な暗闇が度胸比べと技巧比べで演出され』る、我執の種々相の解析」が、『明暗』で「追跡されているテーゼ」であると述べる。

「猜疑・背信・嫉妬・技巧・虚偽・虚栄・独善・偏見・頑迷・狡猾といった我執の醜」をいかに処理するか、いかにその苦痛から自己を救済するか、を文学的課題として追尋してやまなかつたのが夏目漱石である。その彼がたどりついた「則天去私」とは、『無我』『相对即絶対』の境界にはほぼ等しい概念である」と著者は述べ、「自己客体化・相对視を自して『道草』で創出された語り手の、絶対的視点による厳正無私な叙法の客観小説における最初の試みが『明暗』であった」と、見事に両者の相関を位置づけている。

(昭和六十二年十一月十日・桜楓社刊・五、八〇〇円)
(とだ・たみこ 夙川学院短期大学助教授)

書評

宮岡 薫氏著

『古代歌謡の構造』を読む

駒 木 敏

本書は、一貫して古代歌謡に関する論稿を世に問いつけられた宮岡薫氏の初めての論集であり、十数年来の研究の集大成ともい

うべき労作である。刊行を鶴首していた後学の一人として、改めて御教示を得る所が多かった。大方の読者の思いも同じであろう。我々はまた一つ、古代歌謡研究の大きな礎を与えられたことになる。

本書の課題は、『記・紀』を中心とする文献を根幹に据えて、『歌が物語と結合して記紀に成書化されるまでの過程』にあったはずの「多様な歌の実体」を探ることであり、その上で『記・紀』の現在における歌と物語の結合関係の原理を問うことである。つまり、掲げられた「古代歌謡の構造」とは、神話や歴史叙述の中に組み込まれた古代歌謡が、それぞれにいかなる伝承の過程を保ちつつ『記・紀』の現在に位置を占めているのか、ということの意味する。従来、歌謡を含む物語が粗上に載せられる場合、ともすればそれが生成過程や伝承の荷担者層の問題として、いわゆる氏族伝承論の中に解消される傾向が強かった。現有の文献を対象に据え、その内側から歌と物語の結合の論理を導き出そうとする本書の方法的視座は新しく、すぐれて今日的であるといえよう。それは、無前提な伝承論はいうまでもなく、様々なヴァリエーションをもって展開されている「歌語り論」とも、また、専ら『記・紀』の現在を対象化して歌と物語の関係を追う方法とも、方向性を分かつ。歌謡研究の側からいえば、『記・紀』の現在から重層する過去に視線を向け、歌謡の実態を想定した土橋寛氏の《古代歌謡》学の方法とも、一方これを批判的に捉え、『記・紀』の現在としてある歌謡の態様からその伝承及び「抒情」の独自の方法に

ついで一つの解釈を呈示した益田勝実氏の《記紀歌謡》学の方法とも、微妙に立場を異にする。

ここに求められる本書の方法は、一つの語彙、語句の表現の解釈に基づき、その解釈を通して自説を展開するという、徹底した実証主義的方法である。しかも、解釈に際しては、必ず類例が調査され、その実例を示すという方法がとられる。示されるデータは、論述にとって些か煩わしいとさえ思える場合もなくはないが、そのような方法へのこだわりは、

われわれは、先学が構築した方法を自己化し、その有効性を明らかにした上で、それを克服する方法を模索しなければならぬのである。実りのない抽象論を重ねるよりも、一首の歌謡を分析することによって、具体的に方法を展開すべきである。(第一章第三節)

という主張に立脚する。あくまで表現としての言葉に執する限り、むしろ当然のことであろう。表現は言葉であり、構造も言葉である。言葉の内に込められたものをこそ、我々は読み解かなければならない。自明のことにみえるが、徹底して言語表現に執する分析方法には、改めて示唆されるところである。

さて本書は、以下に示すように、三つの章と一つの付編とから構成される。

第一章 『古事記』の叙事詩的方法

第二章 『古事記』『日本書紀』の伝承と歌謡の交渉

『古代歌謡の構造』を読む

第三章 『続日本紀』以後の歌謡の表現 付録 古代歌謡研究文献目録

先ず、八つの節から成る第一章は、「叙事詩的方法」(歌物語的方法)という概念によって、『古事記』の方法的特質の解明を目指す。即ち、伝承性を有する歌謡が物語の表現に引き寄せられ、一つの構成体に組み込まれることによって、古代天皇制の政治的要請に基づく新しい意味を付与されるありようを追い、その際の歌と物語の結合の関係を叙事詩的(歌物語的)方法と規定することと捉えようとするのである。

一節では、記一九番歌の「葦原」に象徴の意味を認め、一方この歌謡を組み込む「物語部分の表現」の「一夜御寝坐しき」に神話の意味を認めて、歌謡の「二人寝し」はこれとの関係で「聖婚儀礼の実修を確認させる表現」となることを述べる。四節では、「かれ多遅比野に至りて寤めまして」の物語表現によって、本来歌垣の歌謡たる記七五番歌が、皇位継承の天皇霊付与の次元へ転化する」と帰結する。これらの論に通底するのは、一つの歌謡が物語に組み込まれる時には、その歌謡の鍵になる表現(言葉)が意識されており、物語の側からすれば、歌謡を物語に接合する場合の鍵になる表現があるのだとする主張である。しばしば、歌謡と物語の矛盾という形で指摘されることの多かった『古事記』のありようについて、ある種の言葉がそれら結び付ける鍵になるとする考察は、極めて説得的である。ここで、歌と物語を結び付ける論理として用意されるのが、古代天皇制の要請であり、その要請

に基づく神話性・儀礼性の視点である。従って、直接に歌謡ないし物語の表現語句の照応関係が意識されない場合も、歌の構築する世界と物語の構築する世界との接合関係は、この一点に焦点を絞ることで明らかにされる。即ち、二節では、ヤマトタケル伝承のミヤズヒメの形象を探りながら、歌謡の中の「乙女」「床」「置きし」等の語彙の内包する意味、あるいはそれを含む類歌の検討から、乙女は巫女的性格を有し、歌謡は「神話的、儀礼的」表現に縁取られていることを述べ、ミヤズヒメの物語全体が「呪的雰囲気」によって構成されていると帰結する。三節は、勸酒歌・謝酒歌の対応にある記三九・四〇の二首が、「なぜ神功皇后によって歌われ、少名彦名神が登場するのか」と問い、この神が常世神であり、王権の本質に結び付くことにその答えを求める。

いずれの論においても、言葉の緻密な読み取りに基づき、しかも解釈の基点には、『古事記』の拠って立つ編集意図が踏まえられる。『古事記』の部分としての個々の物語を、全体の構成意図に配慮しながら位置づける読みは正当である。解釈に際しては、文献的用例の検索の結果の上に豊富な民俗学的知見が駆使され、常に伝承と文献の結合の地点を定位しようとする論法は、斬新かつ刺激的である。

さて本章の各論は、おおむね言語伝承の鍵になる言葉に執して分析を展開する点に特徴があるが、実はそこには二つの側面がありはしないだろうか。即ち、一つは伝承を伝承たらしめている「表現言葉」であり、二つは伝承の構造や形式に関わる「表現言葉

」である。どちらかといえば、「葦原」「一夜寝」などは前者の例であり、歌謡と歌謡（伝承と伝承）の連結を可能にする「又曰」「歌曰」などは後者の例ではあるまいか。その二つの位相が正当に位置付けられたとき、『記・紀』における方法としての「歌と物語の交渉関係」がより明確に像を結び、また、伝承から「記・紀」（それを一つの伝承の過程とみることも可能なのだが）への重層的構造が浮かび上がってくるのではないかと思う。

次に、本章を束ねる「歌物語的」ないし「叙事詩的」方法という概念には、不透明さが残る。「歌と物語」とが交渉している様子を叙事詩的と表現してもよいが、日本文学史の規定によって『歌物語』的と表現することにした。（第二節、傍線評者）とする定義が、かつての英雄叙事詩論争に関わるレヴェルのものでないことは自明だが、ヤマトタケルの物語や神武の物語が対象にされる本章だけに、必然的にそれらとの暗合が想起されてならない。むしろ概念を緩やかに押さえることで、『古事記』の方法をダイナミックに捉えようとしているのかも知れないが、少なくとも、歌と物語の結合の態様を「文学史的に位置付ける」意図からするならば、より明確な概念規定が用意されて然るべきであらう。

続く第二章は、第一章と相わたりながら、歌謡と物語の交渉の態様を具体的に分析する。対象とする『記・紀』の現在に向かつて採られる視点は、基本的に文字（記載）の方法を見据えながら、なお素材としての「伝承」の過程を重視することである。つまり、「歌物語的な形式に構成され、定着されたところの歌謡と物語と

が結合するまでの過程」の解明に力点が置かれる。

本章の各論は、二つの方向に分岐する。「重出歌謡」の分析を手掛かりに、伝承の過程ないし素材としてあった「歌謡群の存在」を想定する一節、さらに、『記・紀』の現在から「記紀定着以前」の歌謡の様相を探る二節などの方向が一つ。口承の論理が書承の論理によって「様式を改変」される様相を問題にする三節などの方向が一つである。(二つの方向は、論述の過程で必然的に重なり合いはするが)著者の視座からして、もちろん後者の論述が中心をなしており、謀反や反乱の物語が考察の対象に上っているのも、そのような意図と無関係ではない。ここで対象とされた部分は、確かに分析が難しいというのが実感であるが、「宇陀」(三節)、「狭井河」(畝火山) (四節)、「金鉏」(九節)など、地名をキーワードと捉える視点は、新たな解釈を拓くものとして共感させられた。あくまでも一つの言葉からという、著者の徹底した読みの方法によって採り当てられた解釈に他ならない。

ただし、謀反の物語はそのまま伝承としてありえたか、ありえたとすれば、どのような構造や鍵言葉によってそれが認定されるのか、この点は是非とも論じて欲しい急所であろう。例えば、「エウカシ・オトウカシの反抗と服属」が「民間伝説」を素材にしている(三節)と言われるけれども、反抗と服属の民間伝説なるものは、説明なしに納得することはできないのではなからうか。フィールドワークに基づく昔話研究などにおいても優れた業績を持つ著者のことであるから、あるいは分かりきった前提が踏まえられ

ているのかも知れないし、歌謡を主な対象とした分析であることの行文上の問題かも知れないが、物語の伝承構造への目くばりの不足が気掛かりである。

実はこのことは、「類型表現」と「伝承性」の関係に対する理解にも関わる。例えば九節においては、「作御歌」などの歌に関わる表現に類型が認められることを、「歌に関わる類型として、歌の表現と呼応関係にあるはずで」とし、そこに歌の類型を想定し、更に類型性は「発想の類型をも意味し」、「民間伝承をふまえた表現であることを語っている」とされる。物語の「類型性」「伝承性」の認定に当たっても、方法は同じである。

記載のレヴェルと伝承のレヴェルを分けようとする著者の立場からすれば、もう少し細かな詰めがあってもよいはずであるし、少なくとも伝承の核となる要素としての言葉(あるいはそれらの要素の集合である構造)と、それらを連結する編纂・編集の次元に関わる言葉との区分けには、留意されてもよいのではなかったかと思われる。

本書の方法からすれば、伝承性を抱えた歌と物語の言語がまずあり、さらにそのそれぞれが記載・成書化に際してどのような「様式の変革」を被るのか、論点は二段階あることになる。七節において、「歌の言語表現と物語の言語表現を同次元の言語として理解すること」への批判を述べる(第一章二節でも)のは、そのあたりへの意識の現れに他ならない。しかし文脈に沿って読む限り、それは伝承性を抱えた歌の言語の固有性に対して、『記・紀』の

物語の「記述の仕方」、即ち、編集のレヴエルにおける表現の性格を意識してのものと理解される。そのことは一方で、物語の言語も伝承性を孕んでいることに對する配慮を欠くことになる。あるいは逆に、『記・紀』の次元でのこととしてならば、文字化された段階における言語は、それはそれとして同一の位相下に対象化される必要があるだろう。尤もそうなれば、これは古代歌謡分析の範圍を超えたところの課題であるともいえるが。

第三章は、今まで真正面に据えられることの少なかった『続日本紀』以後の文献（『続紀』・『日本後紀』のいわゆる歴史書と説話集の『日本書紀』）に記載される歌謡の「古代歌謡史における位置付け」を明確化する。結果的に、饗宴の讃歌と童謡とが取り上げられるのも、本章で扱う資料の性格からの必然であろう。『日本書紀』の事例をも含めて、総じて歴史叙述と歌謡との関係がここでは扱われている。とすれば、この章で取り扱われた文献（歴史書、説話集）の性格への言及があつても良いし、第一、第二章の論述のポイントである「記載」と「伝承性」の関係性に意が用いられても良かったはずである。なぜならば、著者が一、二章で批判的に述べてきた「歌謡の実体推定」の確定に向かつて、ここでは多くの筆が割かれているかみえるからである。しかし、この点については、これらの論の基礎的考察としての意味を汲んで、今後の展開を待つべきであるかも知れない。

今までもにも触れたように、本書の方法的視座の一つは、『記・

紀』の現在のレヴエルで古代歌謡の態様を扱うとする点である。

「歌物語」ないし「歌謡物語」という、『記・紀』の側に取り込まれた歌謡の現在を対象にする場合、それは当然採られる一つの視点なのだが、ここでの論点は、「書くこと」あるいは「文字の方法」が、「歌（謡）うこと」あるいは「口承の方法」を、いかに変革せしめたのかである。そして一方に、歌謡を「実体化」して捉える方法への批判に発する伝承性への視点がある。物語と結合するまでの歌謡の「多様な実体」「多元的な解釈」を求めることであり、そこに伝承との関連がおのずから問題とならざるをえない。それどころか、著者の方法はむしろ、歌謡の伝承的性格を基本的に据える所から出発している。こうして本書は、「伝承性」と「記載性」との二つの課題を含み込む。求められるべきは、一方に伝承を伝承として捉える方法、他方に文字記載（成書化）に固有の原理を追究する方法であり、かつその二つがせめぎあう過程そのものをダイナミックにえぐり出す方法である。

『記・紀』を対象として歌と物語の関係にアプローチする方法的視座を研究的に概観すれば、少なくとも三つの角度が挙げられようか。一つには、書かれた「作品」としての『記・紀』をその表現の現在において分析しようとする立場である。この立場は、「作品」以前としての伝承の世界を切り捨てるか、強い過程や素材について顧慮することはしない（視野に置かない）というのではない。二つは、「伝承」を見据えながらも「書く」行為が伝承（あるいは口承）の行為と対峙的であり、従つて書く行為を通じて明確化

した『記・紀』の現在は、素材としての伝承を止揚することで成り立つとする立場である。三つめは、伝承と『記・紀』の世界とをそのまま連続するものとして対象化する立場であり、ここでは、書くという行為、ないし書くことによる作品構成の方法の変革はあまり問題にされなかった。これらの切り口のいずれが有効であるのかは、今は問わない。ただ、文字の方法についての研究が様々な角度から提言されている現状において、第一、第二の視野の側からの研究を等閑視することは出来ないし、表現の媒材としてみた場合、同じ言語とはいいながら、口承言語の方法と文字言語の方法とが原理的に何がしかの位相の差異を有しているであろうことも、予想に難くない。

今まで伝承性の問題が論じられる場合、「口承」と「記載」の対立項を設定して、多く前者から後者へという単線的な見取り図のもとに論じられることが主であった。しかし重要なことは、伝承という概念はそのまま口承（口誦）と同義ではないし、従って伝承は（一方に「書承」という概念もあるように）、「文字」書記」の方法と対立的、対時的にのみ指定される概念ではないということである。逆にみた場合、記載の方法もまた、素材としての伝承と全く無関係にありえたわけではないことを、いま立ち止まって考えるべきではあるまいか。伝承はむしろ、表現されるものの内なる伝統的な形式・構造・様式などを通して、一つの全体的構造として把握されるべきであろう。本書は、記載の方法による『記・紀』の歌物語を対象にしながら常に伝承性にこだわり続ける点で、必

ずしも『口承と記載』の論に与するものではない。けれども評者が最も気掛かりであった点は、『口承と記載』の先鋭的な課題と格闘しつつ『記・紀』の生成に迫ろうとする本書において、口承の概念が時として伝承の概念にスライドしているのではないかと思われる論述がみられたことである。

本書は、苦悶の書物である。もちろん文体は極めて明解であり、論旨は大胆にして鋭いが、論述の過程には、時として著者の苦悶が苦悶として赤裸々に投げ出されている。著者が格闘する古代歌謡研究の、とりわけ『記・紀』という文献を目前にしての歌謡と物語の結合の原理を探り出す営為は、いままだけ困難な段階にあることを意味する。しかし、読者はそこでかえって不思議な安堵感を覚えるに違いない。この困難な課題にメスを入れながら、いくつかの解決の糸口を提起している本書の論述の方法には、疑問を一刀両断にして一つの結論を強引に作り上げてゆくそれとは違った意味での魅力を覚えるのである。

古代歌謡（の構造）をいかなる地点に立って把握するのか。『記・紀』の現在からその重層的位相を探ろうとするのか、あるいは常に古代歌謡の基層に目を配りながら『記・紀』の現在を明らかにしようとするのか、いずれにしても「伝承」という課題を掲げる時には、その往復の作業は避けられない。著者の苦悶は、古代歌謡研究のこの今日的課題に遠因しているといつてよいであろう。

以上、膨大な本書の細部において、また個々の具体的課題の解明において教えられた一々については、紙幅の都合もあって触れ

えなかつた。永月に互つて積み上げられた一つの体系を前に、臆面もなく敢えて連ねた些かの批評は、自らの研究姿勢を点検し、自戒する意味をも込めてのものである。批判はたやすい。が、著者の目論み格闘している課題の重さに着目するとき、その苦悶がひとり著者のみのもではなく、古代歌謡の、というよりも古代文学の研究に立ち会う者に共通のものであることを思わずにはおられないからである。

著者には、他に初期万葉集についての論稿等もあり、それらが総合されて、さらに多角的な古代歌謡（古代のウタ）の構造の論が示されることを期待して待ちたいと思う。さぞかし見当外れの言述もあつたであろうが、ご海容を乞う次第である。

（宮岡薫著『古代歌謡の構造』、新典社、昭和六二年一〇月刊、四一五ページ、九八〇〇円）

（こまき・さとし 同志社大学教授）

書評

上田博著『石川啄木の文学』を読む

太田 登

近年の啄木研究は従来の伝記研究にかたむきがちであつた動向に清新な潮流を呼びこもうとしている。その最前線に著者上田博がいる。かつて『啄木 小説の世界』（昭55・9 双文社出版）では

とんど黙殺にちかい扱い方をされつづけてきた小説をその犀利な分析によつてよみがえらせた著者は、「日本近代文学の総体のうちにきわめて高い位置を占める」（小田切秀雄）、「明治期の文芸評論の第一級の古典に属する」（猪野謙二）とされながらトータルに把握されていない評論にも鋭い切りこみを示した。

本書は、評論研究の対象となる八十篇のうちから九篇を選び、それぞれをひとつの「作品」として読解してゆく「評論篇」と、前著で論じたこした小説を対象とした「小説篇」の二部から成つている。第一部の「評論篇」の冒頭におさめられた「序説 啄木評論の展開」は、おそらく本書を成す際に書きおろされた論者のようにみえるが、著者自身の多年の啄木研究によつて固められた航海表の公開であつたかもしれない。前著ではその巻頭の「序説・小説家啄木」で十五篇の小説を四期に分された文学的生涯によつて跡づけているが、本書においても同様の方法がとられている。小説・評論のいずれにおいてもそれを啄木自身の文学的立場の展開にそいながらパースペクティブに考察しようとする方向が著者によつてはじめてあざやかに打ち出されたといつてもよい。ともかく、評者啄木の批評的立場を三期に分けて、その史的展開の諸相の特質が論じられる。第一期（明34・9～41・2）では、「啄木は樗牛によつて個人主義を確立し、嘲風によつて普遍性を広げつつその根底を深めた」ところにこの時期の批評的立場の特徴をみる。第二期（明41・3～43・5）では、天才主義の人間観から「普通人」の人間観への、浪漫主義的文学観から自然主義的文学